兵庫県教育委員会丹波教育事務所　教育支援チーム

TNBだより

令和４年２月

今年度も残り２か月程になりました。３学期は今年度の締めくくりと次年度に向けての準備をする大切な時期です。心身共に健康で、“日々努力・日々充実”の気持ちを持って、一日一日を大切にしていきましょう。

また、今年度末で退職される皆様にとっても、感慨深い日々を過ごされていることと思います。永年にわたり子どもたちの育成に大きく貢献されましたことに厚く感謝申し上げます。

さて、２月、３月号は、退職される皆様を代表して、丹波篠山市の学校から２名、丹波市の学校から２名の退職される方に、永年携わってきた教育への思いを綴っていただきます。

日々「ありがとう」の気持ちで・・

丹波篠山市立古市小学校長　　荻野 孝幸

「一番美しいと思う日本語は何ですか？」の第１位は「ありがとう」。これは、数年前にある雑誌に載っていた日本在住の外国人へのアンケート結果です。「ありがとう」という言葉は感謝を伝える言葉であり、私自身も好きな言葉です。この結果には「なるほど」と共感しました。「ありがとう」の語源は「有り難い」、つまり「有ることが難しい＝滅多に無い・珍しく貴重だ」といわれています。したがって、「ありがとう」の反対の意味を表すのは「当たり前」という言葉になります。

私たちは、日常の生活を「当たり前」のように思って過ごしていることが多いのではないでしょうか。また、多くの方に世話になっていることに対しても「当たり前」として特に感謝することもなく過ごしているのではないでしょうか。

しかし、昨年度以降、日常の「当たり前」を「有り難い」と思う出来事が起こっています。それは、新型コロナウイルス感染症の流行です。この感染症の拡大防止対策のため、学校が臨時休校になったり、多くの行事が中止や延期になったり、様々な日常のくらしが制限されるようになったりしました。その時、私たちは改めて日々の平凡な生活が「当たり前」ではなく、「かけがえのない大切なもの」つまり「有り難いもの」だと気づいたのです。

私は今年度末で定年退職を迎えます。38 年間の教職生活では、実に多くの方々に支援していただき、そのお陰で何とか日々過ごしてきたように思います。しかし、今振り返ってみると、そのことに対してどれほど心から「ありがとう」の気持ちを持って、それを表してきただろうか。人から受ける支援や親切を、また、日常の平凡な日々を「当たり前のこと」と思い、過ごしてきたことも多かったのではないだろうか。・・などと反省するばかりです。

今後、どれだけ日々の暮らしの中で、当たり前のことを有り難く思い感謝できるかは分かりませんが、できるだけ、「ありがとう」の気持ちを持って暮らしていけたらいいなと、退職するにあたりしみじみと思った次第です。

小中連携の重要性

丹波市立春日中学校長　　森田 秀樹

校内暴力という言葉が世間を騒がせている時代に中学校の教師になった。苦労したり悩んだりした時は眠れない夜もあったが、それでも子どもたちの悩みに寄り添い、成長していく姿を目の当たりにすることが最大の楽しみであった。

授業では、「楽しくなければ授業じゃない。教師は役者である。」をモットーに日々生徒たちのモチベーションを上げるための工夫をしてきた。楽しいと思えば自ら努力し成長していくと考えたからである。普段から教師と生徒という模範的な関係ではなかったかもしれないが、子どもたちからは「森ちゃん」と呼ばれ親しんでもらい、楽しい教師生活を過ごすことができた。

私にとって大きかったことは３年間小学校長として勤務したことである。小学校の児童が６年間で成長していく姿を目の当たりにし、義務教育９年間を通して小中が連携することの大切さを学んだ。また、中学校勤務だけでは味わうことができなかったことがあった。それは小学校閉校に立ち会えたことである。中学校に比べ地域と連携することが多く、また、様々な行事や記念誌を作成する中、「地域の学校」としての役割や地域の思いを実感することができた。

その後、中学校長として４年間勤めた。中学校では、以前、問題行動が多発した時期があった。それは丹波においても例外ではなかった。そんな荒れた時代に行なってきた上から目線の指導を改め、「指導から支援へ」をテーマに、各々の背景や心情など、一人ひとりをしっかり見つめ、個々の成長を支援する教育を推進してきた。その甲斐あって、勤務校では、教師と生徒、家庭との関係は良好で、私自身も校長として生徒たちと楽しい日々を過ごすことができた。

少子化により小学校や中学校の統合が進む中、次代を生き抜く子どもたちの教育をどのようにすればよいのか、今こそ小学校と中学校が腹を割って話し合い、連携すべき時が来たのではないだろうか。

さて、本年度の教育活動を顧み、来年度への引継ぎや実践目標を作成されている頃だと思います。特に、研究推進や授業づくりについての振り返りと次年度への方向付けについて検討されていることでしょう。子どもが主体的に学習に取り組む態度の向上をめざし、学ぶ楽しさや達成感を体得できる授業づくりをめざしたいものです。再度子どもたちの実態分析をし、つけたい力やめざす子ども像を明確にして研究や授業づくりの方向性を検討していきましょう。あれもこれもと欲張らず焦点をしぼって、職員みんなで進めましょう。来年度に向けて、今がチャンスです。